

砂防工事後の自然植生への復元に関する研究 —工事用道路切り取り法面の7年間の調査から—

新潟大学農学部 丸山幸平
建設省飯豊山系砂防工事事務所 土井 功、石河 滉、志田武司

まえがき

この研究は、飯豊山系砂防工事事務所管内、国立公園内にある荒川水系左支玉川上流部に施工中の砂防ダム工事において、工事完了後は跡地を郷土産樹種により復元せよとし、環境庁より義務づけられたことから、復元のための基礎資料を得る目的で行なわれてゐるものである。

我々は、冷温帶多雪地方の砂防ダム工事に伴う自然植生への復元の課題を、1974年以来毎年朝日国立公園内の飯豊山麓で実施してある。研究は大きく次の2つの角度からアプローチしている。(1) 植生の復元速度を明らかにするための基礎資料づくり、(2) 復元のモデルとしての自然植生の冷温帶夏緑広葉樹林の解析である。(1)の課題に因縁した調査項目として、切り取り法面植生の二次遷移、現地灌木による各種条件下的植栽後の成長の比較上、木本植物の登芽試験等がある。これらの調査を通して、国立公園地域内のダム工事跡地への自然植生の復元速度の実態を把握しようとするものである。そのうち、こゝでは工事用道路切り取り法面の二次遷移の7年間の経過について報告する。

調査地と調査方法

調査対象地としては、山形県西置賜郡小国町長谷ヶ原部落から玉川に沿って上流のスクミ平まで延びる国有林林道2.4km、および技術運搬道路2.4km計4.8kmの区間の切り取り法面とした。この区間は昭和45、46、47年の3ヶ年にわたって道路工事がすみめられ、同時にK31F, CRF, WC, Tim.などによる吹付け工事が施された。スクミ平の気候は、年平均気温9.2°C、年降水量4,097mm、最深積雪387cmで日本有数の多雪地帯である。周辺の植生は典型的な日本海型のブナ林地帯で、ブナ・ヒメアオキ群落を中心とし、トチ・キ林や湿地にはサワグルミ・ヤクモ林が混生している。

調査は工事年度の異なる区間に比較的切り取り法面の長い箇所K、道路と直角に幅1mの帶状の固定試験地と、それぞれ3~4箇所、計10箇所設け、下流からベルトI, II, IIIととした。固定試験地はNへ斜面が多く、傾斜も50°前後とかなり大きい。①おおむね新第三紀の流紋岩と川入層、および先ず第三紀の礫岩層から成る。調査には各ベルトごとにアプロットに区分し、道側からK1, K2, ..., Knと番号をつけた。法面の植生の調査は昭和49年から毎年9月中旬、各アプロットごとに、階層数、階層別植被率、高さを測定後、種類別の被度(%)と高さ(cm)をしらべ、積算被度(SDR)を求めた。調査は昭和45年秋工事、46年秋吹付けた最も下流側のベルトIへIIIおよび、その上流の昭和46年秋工事と吹付けたベルトIIへIIIは、吹付け後丸3年目から9年目まで、また昭和47年秋完了したベルトIVへVは、吹付け後丸2年目から8年目までの実態をしらべたところである。

結果と考察

1. 調査高、種類数と階層構造に対する変化

各ベルトの各アプロットごとの7年間の調査資料から、ベルトIへIIIの平均の調査高と種類数の変

化を図1に示した。

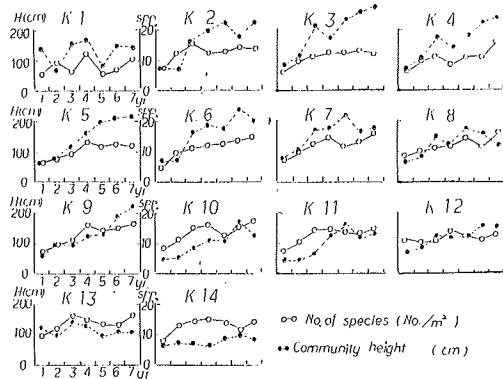


図1. ベルトIへIIIを平均したプロット別
種類数と群落高の年次変化

2. 種類組成による年次変化

2. 1. 在来種の侵入率(図2参照)
2. 2. 木本植物の侵入率(図3参照)
2. 3. 種類組成の変化(図4参照)
2. 4. 主要種と植物の優占度の変化(図5参照)

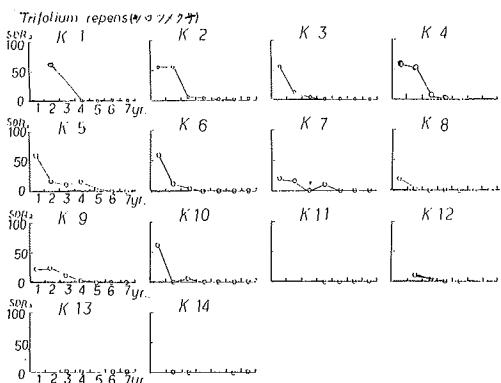


図5. ベルトIIにおけるシロツメクサの優占度
の変化

3. 侵入植物の出現頻度

ま と め

以上、切取り法面の固定試験地114ヶの7年間のデータを中心に、冷温帶多雪地方における自然植生への侵入の実態を検討した。坂はけ工から自然植生への遷移は、量的には急速型、微増型、停滯型に分けられたが、質的の種類組成の変化は、いずれも年々はっきり着実にすんでいる事が明らかにされたといつてよい。しかし、完全に自然植生における変化には、切取り法面でも最低で10年の长期を必要としている事が明らかにされた。今後さらに二次遷移の進行速度を左右して13種構成の解明を通じて、具体的な復元工法への足掛りが、より多く得られるものと確信している。

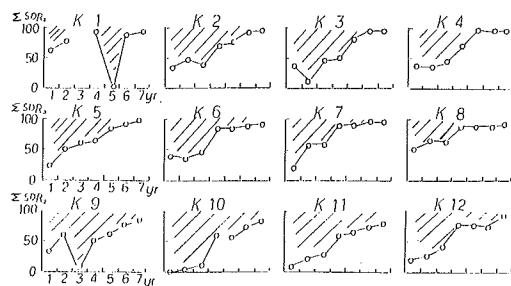


図2. ベルトIIにみられた在来種の侵入率の
年次変化(白地部分)

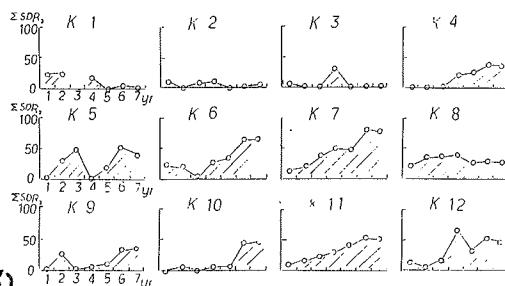


図3. ベルトIIにみられた木本植物侵入率の
年次変化(斜線部分)

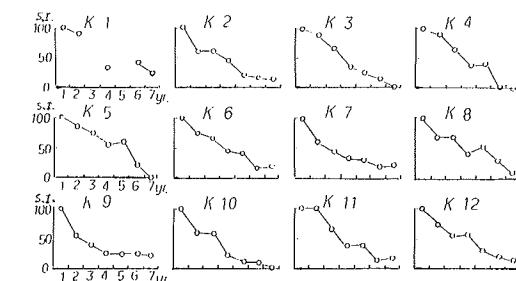


図4. 調査初年度との群落の類似度の変化
(ベルトIIの例)